

他者監視状況下での自己評価が歌唱パフォーマンスに及ぼす影響

安藤 花音

本研究は、他者評価状況における歌唱の自己評価と認知的感情体験がパフォーマンスに及ぼす影響を検討した。

実験は、大阪大学の合唱サークルに所属する学生 20 名を対象に行った。参加者は、短い歌唱を行った後、歌唱の自己評価と歌唱中の認知的感情状態(感情活性・他者への意識・自己不全感)に関する質問紙に回答した。歌唱と質問紙への回答を合わせて 1 試行とし、これを 3 試行続けて行った。また、実験の間参加者の手にディスプレイ電極を装着し、感情に伴う自律神経系反応の指標として皮膚コンダクタンス水準(SCL)を測定した。

本研究が想定したメカニズムは、1 回目の歌唱を低く評価した失敗群では、認知的感情指標の得点が上昇し、次の歌唱の自己評価が低下するというものであった。実験の結果、失敗群の認知的感情得点は 2 回目以降上昇せず、また自己評価も悪化することはなかった。しかし、失敗群と成功群の自己評価得点を比較したところ、失敗群の自己評価は 3 回とも成功群より有意に低く、成功群と同水準まではパフォーマンスを回復できないことが明らかとなった。また、回帰分析の結果から、歌唱の自己評価と認知的感情指標の 3 因子(感情活性・他者への意識・自己不全感)は互いに対して有意な負の影響を持つことが明らかとなった。失敗群の認知的感情指標の各因子の推移に着目すると、感情活性は歌唱を繰り返すごとに低下するが、他者への意識と自己不全感は高いままで低下しなかった。生理指標として測定した SCL については、自己評価得点の間に有意な関係が認められなかった。

以上より、歌唱の失敗認知が感情体験を増大させ、次のパフォーマンスを悪化させるという循環的性質を持った結果は得られなかったものの、認知的感情体験が高い者はパフォーマンスの自己評価が低く、自己評価が低い者は認知的感情体験が高いという関係を確認することができた。また、感情の生理的側面だけでなく認知的側面が歌唱パフォーマンスに影響するということを示すことができた。また、歌唱の失敗を認知した者は、他者への意識と自己不全感が高いまま維持されることによって注意が圧迫され、パフォーマンスの十分な回復を果たせない可能性が示唆された。(応用認知心理学)